平成三十年　カレンダー　日本の名文

五月・六月

藤村詩集

島崎藤村

千曲川旅情の歌

一

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁縷は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香りも知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

椰子の實

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて
汝れはそも波に幾月

舊の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
孤身浮寢の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂ひ

激り落つ異郷の涙

海の日の沈むを見れば
いづれの日にか國へ歸らむ

思ひやる八重の汐々

青空文庫を元としています
参考　：ウィキペディア

島崎藤村（しまざきとうそん、一八七二年～一九四三年）は、日本の詩人、小説家。

私たちが現在、詩として読んだり書いたり鑑賞したりしている文章は、明治以前は存在しなかった。江戸時代までは、和歌や俳句などの音数律や季語などの決まり事が詩の代わりをした。時には内容まで決まっていた。そして、詩といえば漢詩を意味した。維新を経て、今のように、言葉を自由に並べて詩を書くには、先人の言葉による実験と冒険が必要だった。

言文一致という、話し言葉と書き言葉を一致させる言語の近代化と並行して、詩の近代化を推し進めたのが、「新体詩」と呼ばれる詩の運動である。そのもっとも優れた達成の一つが、島崎藤村の「若菜集」だった。

それは、単に言葉の近代化にとどまらず、心の変化ももたらした。いまでは、古風に思える五七調のこれらの詩は、明治半ば、大変新鮮で、初々しく、青春という概念が初めて日本人にもたらされたことを示している。

甘く切なく、不安と希望に満ち、故郷を拒否しながらなつかしむ、社会的な個人となる前の、青春という猶予期間。その時期を描くことが、文学の大切な機能だった。

今では、過去のものとなったこうした情緒は、いまも私たちの心の風景を支えているように思える。

藤村は後に、詩に訣別して、「破戒」や「夜明け前」の小説家となる。

なお、「椰子の實」は、伊良湖岬に流れ着いたヤシの実の話を柳田国男から聞き、着想を得たとされる。

後に、作曲家の大中寅二によって曲が付けられた。